



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	未婚母子世帯の生活と社会関係 : 北海道ひとり親家庭生活実態調査より
Author(s)	江, 楠
Citation	教育福祉研究, 24, 21-37
Issue Date	2020-02-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76888
Type	departmental bulletin paper
File Information	030-0919-6226-24.pdf



未婚母子世帯の生活と社会関係 —北海道ひとり親家庭生活実態調査より—

江 楠

1. はじめに

平成 28 (2016) 年全国ひとり親世帯等調査結果報告によると、母子世帯となった理由は、未婚 (8.7%)、死別 (8.0%)、離別 (79.5%) 等となっており、未婚の母は平成 23 (2011) 年の 7.8% と比べて、0.9% の増加となった。

社会保障による対応に相違があるため、母子世帯類型による経済水準の格差が生じている。同じく平成 28 (2016) 年全国ひとり親世帯等調査結果報告によれば、平成 27 (2015) 年の母子世帯の母の年間収入は、未婚 177 万円、離婚 205 万円、死別 186 万円である。「児童のいる世帯」の年間収入 707.6 万 (平成 28 年の国民生活基礎調査) と比較すると、未婚母子世帯の年収はその 2 割強にしか及ばず、極めて厳しい経済状況であり、社会的支援を要するような生活困難を抱えている未婚母子世帯が層として存在することが分かる。

湯澤 (1999) による社会福祉施設利用した女性についての調査では、非婚出産女性は、住居、就労及び経済を含めた、生活基盤の喪失を経験し、また、非婚妊娠・出産という事実により、子どもの父・家族・家主・職場の関係者といった生活に密着した人間関係の中から忌避・隔離・隠蔽という対処がなされて、本人の孤立を進行させるという傾向がある。したがって、未婚という事由でひとり親となった女性の生活や社会関係を検討する必要がある。

しかしその一方で、ひとり親家庭に関する研究においては、離別、死別という事由でひとり親となった女性に注目することが多く、未婚 (非婚) 母子世帯の生活や社会関係に着目して示された資

料は少ない。そこで本稿は、2017 年に実施された「北海道ひとり親家庭生活実態調査」のデータを用いて、未婚でひとり親となった母子世帯の生活の実態を明らかにすることを目的とする。特に、未婚母子世帯の母の社会関係に着目し、どのような特徴があるのかを考察する。

2. 分析の方法

(1) 調査の概要

「2017 年北海道ひとり親家庭生活実態調査」は北海道保健福祉部子ども未来推進局子ども子育て支援課が、北海道大学大学院教育学研究院に委託し実施したものである。調査対象は、札幌市を除く北海道全域で児童扶養手当を受給しているひとり親世帯である。対象世帯の抽出、調査票の配布と回収は北海道が行い、調査票の作成と調査結果の集計および分析は北海道大学が行っている。調査項目は、家族の状況、仕事の状況、家計の状況、子育ての状況、ひとり親世帯になった前後の状況、これまでの経験と社会関係、制度利用等である。また、調査票の最後に「ひとり親世帯であるために社会的な偏見を感じたこと」、「現在の生活において感じていること」、「公的制度についての要望と意見」に関する自由記述回答設問を設けた。

(2) 本研究におけるデータの扱い方

「2017 年北海道ひとり親家庭生活実態調査」の回収率は 48.2% で、有効回答票数は 2,169 となっている。回答世帯の内訳は表 1 の通りである。本稿では、表 1 の母子世帯のうち、単独の母子世帯 1,558 を分析する。表 2 は母子世帯となった理由の内訳を示す。未婚母子世帯の特徴を把握するため、本稿では、未婚母子世帯 178 以外に、離別母

表1 回答者の世帯類型 (単位：世帯)

母子世帯	1,904	単独の母子世帯	1,558
		母子＋祖父母世帯	334
		母子＋その他世帯	12
父子世帯	232	単独の父子世帯	176
		父子＋祖父母世帯	55
		父子＋その他世帯	1
母子、父子判別できない世帯		33	

表2 母子世帯となった理由 (単位：世帯)

母子世帯 (1558)	離別	1,361
	死別	12
	未婚	178 ¹⁾
	その他	2
	無回答	5

注1)「非婚」と回答した18世帯を含む。

子世帯のデータ1,361も取り上げ、合わせて分析していく。

また、未婚母子世帯の生活実態と社会関係に関して、自由記述回答にも具体的な生活状況が表れていると考えられるため、本稿では、未婚母子世帯の自由記述の回答も引用し、合わせて確認していく。具体的には、経済、就労、子育ての中で、どのような困難を抱えているのかについて、「ひとり親世帯であるために社会的な偏見を感じたこと」、「現在の生活において感じていること」、「公的制度についての要望と意見」における未婚母子世帯の自由記述を引用し、量的データと合わせながら確認していく。また、未婚母子世帯の母がどのような社会的な偏見を感じたのか、および公的制度に対する要望や制度利用中に抱える困難についても、これらの自由記述を引用しながら確認する。

3. 未婚母子世帯の生活

未婚母子世帯の生活実態を把握するため、まず、母の年齢、健康状況、子どもの人数と末子年齢を把握する。また、世帯年収、家計の状況、貯金状況から未婚母子世帯の経済状況を確認する。そし

て、現在、学校卒業後、子どもの誕生後、ひとり親になった後における就労状況と、現在の雇用形態及び仕事の悩みと不安から仕事の状況を見ていく。さらに、子どもの事で悩んでいる事、子どもに期待する最終学歴、子どもの学資保険の状況を確認していく。

(1) 世帯の状況

まず、「2017年北海道ひとり親家庭生活実態調査」を「平成28(2016)年度全国ひとり親世帯等調査結果報告」と照らし合わせて、北海道の未婚母子世帯の概況をとらえる。

母子世帯の母の年齢は、表3のように、全国・北海道ともに40歳代が最も多いが、北海道の母の年齢がやや低い。また、未婚母子世帯は、離別母子世帯と比べて年齢が低い層で、特に20代以下に多く分布している。今回の調査対象は児童扶養手当を受給しているひとり親世帯であるため、母の年齢が若い年齢層に偏る傾向にあると考えられる。

表4に母の健康状況を示す。未婚、離別のいずれの世帯においても、「健康である」が6割程度である一方、「通院している」「通院していないが体調が悪い」という体調上の問題や不安を抱えている母が、4割にのぼる。

子どもの人数については、全国・北海道ともに「子ども1人」の世帯が最も多いが、北海道調査の未婚母子世帯では87.6%と特に多い(表5)。

表6に示した末子年齢については、未婚母子世帯、離別母子世帯いずれにおいても、小学生の割合が一番高い。また、中学生と高校生を合わせると4割以上である。

表3 母の年齢 (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)	全国母子世帯 ¹⁾ (2,060)
20 代以下	16.9	6.3	7.9
30 代	37.1	37.1	30.2
40 代	39.3	47.5	48.0
50 代以上	5.6	8.1	12.1
無回答	1.1	1.0	1.8

注1) 平成 28 (2016) 年度全国ひとり親世帯等調査結果にもとづく。表 5、表 7 も同様。

表4 母の健康状況 (複数回答、単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
健康である	60.1	62.6
通院している	28.1	27.0
入院中である	0.0	0.3
通院していないが体調が悪い	10.7	9.8
障害認定を受けている(難病をのぞく)	1.7	1.2
難病の指定を受けている	0.0	1.1
その他	1.1	1.5
無回答	0.6	0.5

表5 子どもの人数 (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)	全国母子世帯 (2,060)
1 人	87.6	48.0	57.9
2 人	8.4	39.8	32.6
3 人	1.7	8.9	6.8
4 人以上	0.6	2.3	1.6
無回答	1.7	1.1	— ¹⁾

注1) 全国調査は無回答を除外して集計している。表 7 も同様。

(2) 経済状況

表 7 で母子世帯の世帯年収をみると、全国の未婚母子世帯は「100 万円未満」と「100～200 万円未満」の合計が 27%であるのに対し、北海道の未婚母子世帯では 70.3%である。また、全国の離別母子世帯は「100 万円未満」と「100～200 万円未満」の合計が 21.9%であるのに対し、北海道の離別母子世帯では 53.4%である。北海道の母子世帯、特に未婚母子世帯の経済的状況が極めて厳しいことがわかる。

表 8 に示したように、家計の状況については、

表6 末子年齢 (学校区分) (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
乳幼児	14.0	20.4
小学生	37.6	34.8
中学生	25.8	20.6
高校生	19.7	21.9
高卒以上	0.0	0.4
年齢不明	2.8	1.9

「赤字であり借金をして生活している」が未婚母子世帯、離別母子世帯のいずれも 1.5 割であり、

表7 世帯年収

(単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)	全国未婚 (100)	全国離別 (939)
100万円未満	15.8	10.8	5.0	5.5
100～200万円未満	45.5	42.6	22.0	16.4
200～300万円未満	21.3	29.5	29.0	26.9
300～400万円未満	9.6	9.5	16.0	20.3
400万円以上	1.7	3.2	28.0	30.8
無回答	6.2	4.4	—	—

表8 家計の状況

(単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
赤字であり借金をして生活している	17.4	15.0
赤字であり貯金をとりくずしている	20.2	19.8
黒字でも赤字でもなくぎりぎりである	48.9	53.1
黒字ではあるが貯金はしていない	7.3	3.7
黒字であり毎月貯金をしている	3.9	6.9
無回答	2.2	1.5

「赤字であり貯金をとりくずしている」が2割を占める。赤字で生活している母子世帯が3割以上で、家計が厳しい状況であることが分かる。「黒字でも赤字でもなくぎりぎりである」がいずれの世帯類型においても最も多く、半数程度を占める。

次に未婚母子世帯の資産について確認する。収入が少なくても、貯金などの資産があれば、生活の状況は違うと考える。表9で、貯金については、「貯金がない」世帯は未婚母子世帯で41.6%、離別母子世帯で34.8%を占める。

未婚母子世帯の自由記述からは、経済状況が厳しいため、独身時代の貯金を切り崩して生活している状況も見られる。

- 独身時代の貯金を切り崩して何とか生活をしている状況。

また、現在の収入で、家賃、光熱費、電話代、灯油代等を含めた、日常的な生計を維持することが難しく、赤字で生活している様子もうかがわれる。

表9 貯金

(単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
貯金はない	41.6	34.8
10万円未満	14.0	9.5
10～50万円未満	19.1	16.2
50～100万円未満	7.9	12.0
100～200万円未満	5.1	10.0
200～300万円未満	2.2	6.2
300～500万円未満	2.8	4.8
500～1千万円未満	2.2	2.9
1千万円以上	1.7	1.0
無回答	3.4	2.5

- 家賃、光熱費、電話代、灯油代など…。赤字でストーブ使えないという事も何度かありました。

さらに、収入が少ないために、どのように生活していけばいいかわからないという、日々不安や悩みを抱えている状況もある。

- 今現在、家賃を入れて11万円ちょっとで生活

が大変です。税金がかかるので食品も高いです。(子どもが高校を)卒業したら、5万円前後家賃、3万円で光熱費、残のお金は1万円弱です。どうやって生活すれば良いのですかね。

表10 現在働いている状況 (単位: %)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
働いている	84.3	91.5
働いていない	15.7	8.5

以上のように、多くの未婚母子世帯は収入が低く、経済的にはかなり厳しい状況であることが分かる。また、脆弱な経済的基盤で、将来の生活に対する不安を抱えていることも見受けられた。

(3) 仕事

ひとり親、特に母子世帯の母は働いていないから貧しい状況になるのではないか、と思われるかもしれないが、実際には、母子世帯の母の就労状況を見ていくと、いずれの時期でも高い就労率である状況が分かる。表10に示したように、離別母子世帯では91.5%、未婚母子世帯では84.3%が現在働いている。これまでの就労状況を見ていくと、学校卒業後の時点ではほとんどの人が仕事に就いている。子どもの誕生後は、学校卒業後の時点より減るが、離別母子世帯で61.6%、未婚母子世帯で72.5%は仕事をしていた(表11)。表12でひとり親となった後の就労状況を見ると、「仕事先や仕事内容をか変わった後、今は仕事をしてい

ない」、「仕事をしていない」の合計はいずれの世帯においても、1割ほどしかない。

雇用形態については(表13)、離別母子世帯と未婚母子世帯いずれも「正規の職員・従業員」と「臨時・パートタイマー」が最も多く3割を超える。「派遣社員・契約社員・嘱託」については、離別母子世帯と未婚母子世帯いずれも1割を超える。非正規の仕事で働く母が多いことが分かる。

それでは、現在の仕事について、どのような悩みと不安を抱えているのだろうか。表14に現在の仕事の悩みや不安を示した。いずれの世帯においても、「収入が少ない」が最も多く、4割を超える。未婚母子世帯の自由回答にも収入が少ないため、生活をぎりぎり維持して、貯金が出来ないという現状であることが見られた。

- 収入が少ない……。生活をするのがやっとで、子供をどこにも連れて行ってあげられなく申し

表11 各時期に仕事をしていたか (単位: %)

	学校卒業後		子どもの誕生後	
	未婚 (178)	離別 (1,361)	未婚 (178)	離別 (1,361)
した	94.4	96.9	72.5	61.6
しなかった	3.9	1.7	23.6	36.4
無回答	1.7	1.4	2.2	1.2

表12 ひとり親となった後の就労状況 (単位: %)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
引き続き同じ仕事をした	29.8	28.9
職場内で部署や仕事内容をかえた	2.2	1.5
新たにみつけた・転職した	52.8	60.2
仕事先や仕事内容をか変わった後、今は仕事をしていない	0.6	0.8
仕事をしていない	8.4	4.2
その他	3.4	2.7
無回答	2.8	1.8

表 13 雇用形態

(単位：％)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
働いていない	15.7	8.5
正規の職員・従業員	30.3	36.0
臨時 (季節雇用をふくむ)・パートタイマー	36.0	37.8
派遣社員・契約社員・嘱託	12.4	12.7
自営・内職・家族従事者	2.2	2.9
その他	2.2	1.7
無回答	1.1	0.4

表 14 仕事の悩みと不安

(複数回答、単位：％)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
朝が早い	8.4	9.6
帰りが遅い	12.4	14.0
通勤時間が長い	6.7	6.3
勤務時間が長い	6.2	11.2
夜勤や交替勤務がある	2.8	6.0
残業が多い	3.9	9.3
休みが取りにくい	20.2	24.6
収入が少ない	43.3	46.7
資格をいかせない	6.2	2.9
雇用や身分が不安定	14.0	15.2
雇用期間が限られている	3.9	6.3
昇給・昇進が遅い	13.5	14.0
先の見通しがもちににくい	18.0	25.9
ノルマが厳しい	2.8	2.6
仕事の内容	12.4	12.8
職場の人間関係	20.8	18.1
パワハラやセクハラ	6.7	5.5
その他	3.4	5.4
とくに悩みや不安はない	9.0	10.9
無回答	3.4	1.2

訳なく思う。貯金ができない。

仕事の悩みや不安として「先の見通しがもちににくい」も多く、いずれの世帯においても 2 割を超える。子どもが小さいため、仕事を頑張って正社員になりたくても、なかなか難しく感じている現

状がある。

- やはり、小さい子どもがいると、正社員というのが難しいと感じます。

また、「休みが取りにくい」も、いずれの世帯においても 2 割を超える。

- 中々仕事についても、休む事が多くなったりすると職場の人達に色々言われたりする。
- 子供が病気にかかってもなかなか仕事を休めない。

さらに、日頃から仕事と子育ての両立が出来ず、そのバランスを崩していく様子もうかがわれる。

- 収入を優先すべきか、子どもとの時間を大切にすべきかわからない。自立できる自信がない。
- 仕事と子育てを両立できない事。働いても子供との時間を合わせられない。たまに生きる希望をなくす時がある。
- 子供が小さいと仕事とは両立が大変である。子供との一緒にの時間をとると収入が少なく生活がくるしくなってしまう。

多くの未婚母子世帯の母にとって、収入が少ないのは最も大きな悩みである。また、仕事は子育てとの両立が大きな課題であることが分かる。

表 15 子どもの事で悩んでいる事（複数回答、単位：％）

	未婚（178）	離別（1,361）
子どもとの団らんや話し合いの時間がもてない	9.6	15.8
親子関係	6.7	8.7
子どもの病気や障がい	10.1	10.1
子どもの発達やしつけ	30.3	20.1
保育園や学校でのようす	13.5	7.9
子どもの友だち関係	12.9	14.8
子どもの学習や進路	35.4	46.1
子どもの不登校やひきこもり	2.8	4.1
いじめ	2.2	2.7
子どもの非行や不良行為	2.8	1.6
子どもの就職	7.3	14.3
その他	2.2	2.1
とくに悩みはない	29.2	23.5
無回答	3.9	3.1

（４）子育て

表 15 は子どもの事で悩んでいる事を示している。いずれの世帯においても、もっとも多いのは、「子どもの学習や進路」についてであり、未婚母子世帯 35.4％、離別母子世帯 46.1％である。ひとり親であるため、子どもの学習をみる時間が少なく、子どもの学力を心配している様子が自由記述からもうかがわれる。

- 学校に入ったら勉強見てあげる時間がない気がします。ひとり親の子は学力が低いとデータがあるので心配です。

「子どもの発達やしつけ」という回答も多く見られ、未婚母子世帯は 30.3％、離別母子世帯は 20.1％である。離別母子世帯より、未婚母子世帯が「子どもの発達やしつけ」に関する悩みが多いのは、未婚母子世帯の方が子どもの年齢が小さいことによると考えられる。ほかに、「子どもの時間が持てない」、「子どもの友だち関係」などもあげられている。「子どもの時間が持てない」については、仕事に関しての悩みでも述べたように、経済的には厳しい状況であり、母が収入を確保す

るためには、子どもとの時間を削り、子育て時間が少なくなる。仕事時間を減らせば、子どもと過ごす時間を確保できるが、収入が低くなり、生活費用や子どもの教育費に関して難しくなるという問題がある。

- 子供が幼い頃は良く熱を出したり等でほとんど仕事を早退したり、お休みせざるを得ない状況が続き、保育園に預けることが難しくなりそうになったり、収入面で大変になった事もあった。
- 子供との時間がとれない。とろうと思うと収入が下がる。
- 一緒にいる時間が短い、働かなければお金にならない。子供もつらい。

表 16 で子どもに期待する最終学歴を見ていくと、離別母子世帯と未婚母子世帯いずれも「高校」と「四年制大学またはそれ以上」が同程度であり、4 分の 1 を占める。「専門学校」が 1.5 割近い。これらを合わせると 4 割を超え、子どもに高等教育を受けさせたい母が少なくない。しかしながら、表 17 で子どもの学資保険の状況を確認すると、いずれの世帯においても、学資保険をかけて

表 16 子どもに期待する最終学歴 (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
中学	0.6	0.2
高校	23.0	25.3
高等専門学校	5.6	4.0
短期大学	2.8	4.6
専門学校	13.5	16.2
四年制大学またはそれ以上	23.0	24.1
まだわからない	28.1	20.9
その他	1.7	2.0
無回答	1.7	2.7

表 17 子どもの学資保険 (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
かけている	39.3	38.2
以前はかけていたが今はかけていない	5.6	13.4
かけていない	54.5	47.0
その他	0.0	0.7
無回答	0.6	0.7

いない世帯の方が多い。「以前はかけていたが今はかけていない」と「かけていない」を合わせて、いずれの世帯類型においても6割を占める。子どもが高等教育を受けたくても、子どもの教育費に関して、経済的にも余裕がない世帯が多く、悩んでいる状況は自由記述からも確認できる。

- できることなら本人の希望する大学進学の方に進みたいが、その為の塾など、経済的負担があまりにも大きい。
- ひとり親で収入も少なく、将来、四年制大学に進学したいと言われた時、喜んでどうぞとは言えないのが現状です。
- 子への教育費がどんどん増え、本当に厳しいが、娘は両親がいる家庭の子と仲が良いので、お金を理由に進学を止めさせたくない。
- 貯金が出来ていない現状だと、大学まで行かせてあげれるか不安です。

以上のように、未婚母子家庭において、子育て

の悩みに関しては、子どもの学習や進路に最も心配している。多くの母子世帯では、子どもに高等教育を受けさせたいと考えている。しかし脆弱な経済的基盤や、また非正規の就労で収入が低いと考えられ、子どもの教育や子育てに関する支出が制限されている傾向にある。

4. 未婚母子世帯の社会関係

社会関係において、未婚母子世帯は日常的にどのような支援を受けているか、周囲との関係や制度の利用状況はどのようなものであるかについて確認することは重要である。

そこで、まず、日常的な支援については、子育てに関する支援と親との関係の二つ側面から確認していく。具体的には、子育てに関する支援については、小学校入学前の子どもの日中の世話をする人と、小学校低学年の子どもの放課後の世話をする人、子どものことで悩みがある時に相談する相手、母が病気などの時に子どもや母の身の回りの世話を頼む相手から確認する。また、親との関

表 18 小学校入学前の子どもの日中の世話をする人
 (「小学校入学前の子はいない」世帯を除いた回答割合、単位：%)

	未婚 (68)	離別 (252)
保育所・託児所	75	69.4
幼稚園	5.9	12.7
母自身	11.8	6.3
同居の親・親せき	0.0	0.8
同居していない親	0.0	0.0
親以外の同居していない親せき	0.0	0.8
その他	1.5	1.2
複数選択による無効回答	2.9	3.6
無回答	2.9	5.2

表 19 小学校低学年の子どもの放課後の世話をする人
 (「小学校低学年の子はいない」世帯を除いた回答割合、単位：%)

	未婚 (56)	離別 (350)
学童保育・児童館	37.5	48
母自身	30.4	14.6
同居の親・親せき	5.4	5.1
同居していない親	7.1	5.4
親以外の同居していない親せき	0.0	0.6
友人・知人・近所の人	0.0	0.0
子ども・きょうだいだけですごす	5.4	9.1
その他	0.0	2.6
複数選択による無効回答	3.6	4.9
無回答	10.7	9.7

係については、親は困ったときに頼れるか、各時期に親からの援助があるか、母が 20 歳になるまでに家族とどのようなことを経験したのかから確認する。周囲との関係については、親以外の人との関係と社会的な偏見の二つ側面から見ていく。具体的には、親以外に頼りになる人がいるか、日頃に連絡取るまたはお互いの家を行き来する人や、立ち話をするような付き合いのある人から確認する。ひとり親世帯であるために社会的な偏見を感じたことがあるかを確認する。最後に、ひとり親世帯にかかわる制度や相談員の利用経験と認知から、未婚母子世帯の母の公的制度の認知度と利用状況を確認する。

(1) 日常的な支援

1) 子育てに関する支援

未婚母子世帯の母は、仕事や子育て、家計のやり繰りなど、様々な葛藤を抱えている。しかしながら、子育てなどは母親一人で頑張るだけではなく、行政や周りの支援が不可欠ではないかと考える。

まず、子育ての環境から周囲の支えを見ていく。表 18 と表 19 に、「小学校入学前の子どもの日中の世話」と「小学校低学年の子どもの放課後の世話をする人」を示しているが、全体的として、保育所・託児所が多い。これに幼稚園を加えると、多くの母子世帯が保育・就学前教育制度を利用していることが分かる。また、離別母子世帯より未婚母子世帯は母が自分自身で子どもの世話をする

表 20 子どものことで悩みがある時に相談する相手
(複数回答、単位：％)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
同居の家族	14.0	12.3
別居の家族・親せき	51.1	55.1
元配偶者 (子どもの親)	2.2	4.6
近所の人	1.1	1.5
職場の人	24.7	25.5
それ以外の友人・知人	48.9	49.4
保育園・幼稚園・学校などの先生	24.7	18.9
母子・父子自立支援員などの公的な相談員	5.1	4.0
その他	2.2	2.3
誰もいない	7.3	8.0
無回答	1.1	1.0

ことが多い。自由記述にも、子どもが病気になった時に、仕事の休みを取りにくく、またよく早退することによって、収入を確保することが難しいことに悩んでいる様子がうかがわれる。さらに、保育サービスを充実させることや、学童保育の預かり時間を延長すること、また病児保育施設を増やしてほしいという意見があった。

- 子供が幼い頃は良く熱を出したり等でほとんど仕事を早退したり、お休みせざるをえない状況が続き保育園に預ける事が難しくなりそうになったり、収入面で大変になった事もあった。
- 安心して子供を預ける所が学童しかない点、遅い時間までは対応していないので。(あと日祝など) 困っているお母さん多いです。
- 子供が保育日の時は少し熱があったり、病後時など、長く休むのが無理な時みてもらうのが大変でした。お金がかかっても、そういう施設を増やしてほしい。
- 個人的に認可の保育所へ入所もスムーズにできたので、あとは子供が熱を出した時等でもサポートしてくれる施設や機関がかんたんに手続きできたらいいなと思った。

こうしたデータから見ると、多くの未婚母子世帯の母は、子育て生活の中で学童保育や保育園を

最も重要な担い手として利用することが分かる。また仕事で忙しく、残業しなければならない場合も多く、子どもが病気になってもなかなか休めないため、放課後に遅い時間までの預かり学童保育に対する要望が大きいという現状である。

次に、「子どもの事で悩みがある時に相談する相手」を見ていく。いずれの世帯類型においても、「別居の家族・親せき」が最も多く、半数を超える。これに「同居の家族」を加えると、多くの母子世帯が家族・親戚に相談していることが分かる。また、「それ以外の友人・知人」がおおよそ半数である。ついで、「職場の人」、「保育園・幼稚園・学校などの先生」があげられた(表 20)。

「母が病気などの時、子どもや回答者の身の回りの世話を頼む相手」については、いずれの世帯類型においても、「別居の家族・親せき」が最も多く、「同居の家族」と合わせて見ると、8 割以上である。一方、「誰もいない」については、離別母子世帯より、未婚母子世帯がやや多い(表 21)。

2) 親との関係

母子世帯にとっては、日常的な支援を提供しているのは、保育以外に、主に親・親戚が中心であることを確認した。それでは、未婚母子世帯と親との関係はどのような状況であろうか。表 21 と表 22 には、困った時に親は頼れるか、また、各時期に親からどのような援助を提供されたのかを示

表 21 母が病気などの時、子どもや母の身の回りの世話を頼む相手 (複数回答、単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
同居の家族	18.5	18.4
別居の家族・親せき	58.4	65.6
元配偶者(子どもの親)	0.6	2.1
近所の人	0.0	0.7
職場の人	0.6	0.6
それ以外の友人・知人	5.6	6.4
ホームヘルパー	0.6	0.2
その他の公的機関	3.4	0.7
その他	1.1	1.5
誰もいない	19.1	14.0
無回答	1.7	1.0

す。

「困ったことがあるときなどに親が頼りになるか」については、多くが「頼りになる」としているが、未婚母子世帯は離別母子世帯よりやや低い(表 22)。また、「ひとり親になった時の、回答者の親からの援助」について、「そのような援助はなかった」という回答は、離別母子世帯の 23.7% より、未婚母子世帯のほうが高く、37.1% である。「現在の親からの援助」については、「そのような援助はなかった」という回答は、ひとり親になった時点よりも割合がやや多く、離別母子世帯が 30.3%、未婚母子世帯が 41.0% である(表 23)。

また、未婚母子世帯の自由記述には、家族や親戚からの無理解の様子も見られた。こうしたことから周囲に援助を頼むことができない場合も存在

表 22 親は困ったときに頼れるか (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
親はいない	4.5	3.8
頼りにならない	32.0	25.9
頼りになる	60.7	66.3
無回答	2.8	4.0

すると考えられる。

- 未婚の母という事を恥だと言う親戚がいる。
- 祖父母は未婚の娘がいる事をどこまで受け止めているのか。あまり仲は良くないし、近所から色々言われて迷惑をかけていることが私はツライ。

表 24 は、母自身が 20 歳までに経験したことである。「両親の離婚」については、離別母子世帯の母は 21.1%、未婚母子世帯の母は 29.8% である。「父母の仲が悪くけんかが絶えなかった」では、離別母子世帯の母が 26.8%、未婚母子世帯の母が 33.7% である。「父や母がくり返し家をあけていた」については、いずれの世帯類型においても 2 割前後で、「経済的に困っていた」は離別母子世帯の母が 26.2%、未婚母子世帯の母は 37.6% である。「生活保護」は離別母子世帯 5.1%、未婚母子世帯 13.5% が経験したことがあった。

多くの未婚母子世帯の母は成人するまでに経済的困難や両親の離婚などの生活上の困難や問題を経験していたことが分かる。このような経験が、

表 23 各時期における親からの援助 (複数回答、単位：%)

	ひとり親になった時		現在	
	未婚 (178)	離婚 (1,361)	未婚 (178)	離婚 (1,361)
お金の援助	16.9	22.3	9.6	10.1
子そだてについての援助	42.1	48.5	37.1	42.1
住まいについての援助	28.1	26.2	16.9	13.2
食料など物での援助	35.4	53.4	30.9	46.7
そのような援助はなかった	37.1	23.7	41.0	30.3
無回答	1.1	1.2	3.4	2.1

表 24 母が 20 歳になるまでに経験したこと (単位: %)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
母の死亡	2.2	2.6
父親の死亡	13.5	6.6
両親の離婚	29.8	21.1
親の慢性的な病気や障害	16.3	14.2
自身や兄弟の慢性的な病気や障害	10.1	6.1
父母の仲が悪くけんかが絶えなかった	33.7	26.8
父や母がくり返し家をあけていた	21.3	15.3
両親の間でのたび重なる暴力	15.7	9.7
子どもに対する親からのたび重なる暴力	10.7	8.7
自身や兄弟の施設での生活	4.5	1.0
経済的に困っていた経験	37.6	26.2
生活保護を受けていた経験	13.5	5.1

現在の親からの援助（の受けにくさ）にも影響を与えている可能性もある。

(2) 社会関係

1) 親以外の人との関係

それでは親や親戚以外の周囲との交流はどうだろうか。まず、「親以外に頼りになる人」としては、「兄弟・姉妹」、「友人・知人」が多くあげられた。また、「頼りになる人はいない」という回答が4分の1を超え、離別母子世帯より未婚母子世帯の方がやや多い（表 25）。

表 26 は日頃の周囲との付き合いの状況を示している。「日頃連絡を取り合ったり、お互いの家を行き来する人」については、いずれの世帯類型においても、「そのような人はいない」が最も多く、離別母子世帯が 34.1%、未婚母子世帯では 40.4% である。「日頃立ち話をするような付き合いのある人」については、「保育園や学校などの他の子どもの親」と「職場の人」が多い。「そのような人はいない」は、離別母子世帯が 23.3%、未婚母子世帯で 28.1% である。

自由記述からは、未婚母子世帯の母が子どもが病気になってしまった時でも、仕事を休めないため、親や周りの支援を求めたい。

- 子供が病気にかかってもなかなか仕事を休めないため、親や周りの援助は必要だと思う。

表 25 親以外に頼りになる人 (複数回答、単位: %)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
兄弟・姉妹	42.7	42.2
友人	36.0	38.7
近所の人	1.7	3.8
職場の人	8.4	12.5
成人・独立した子ども	2.8	5.0
その他	5.6	3.5
頼りになる人はいない	28.1	26.1
無回答	1.1	1.8

また、家を借りる時に、保証人などが必要な場合に、援助がなく、悩んでいる様子がうかがえる。

- ひとり親家族で頼る人や親も誰もいないと家を借りる時、保証人が困る。

子育てには、母だけではなく、社会や地域など、多くの人の手が必要であるが、現実には、親や親戚以外には、未婚母子世帯に頼りになる人がほとんどいないという現状である。

2) 社会的な偏見

表 27 は、ひとり親世帯のために社会的偏見を感じた経験について示しているが、未婚母子世帯は 38.8%、離別母子世帯 31.6% である。ひとり

表 26 日頃、周囲との付き合い

(複数回答、単位：%)

	日頃、連絡取るまたお互いの家を行き来する人		日頃、立ち話をするような付き合いのある人	
	未婚 (178)	離別 (1,361)	未婚 (178)	離別 (1,361)
保育園や学校などの他の子どもの親	29.2	29.2	43.8	45.0
職場の人	14.6	17.7	41.0	42.5
近所の人	3.9	6.5	25.3	26.7
その他	29.8	27.8	4.5	8.5
そのような人はいない	40.4	34.1	28.1	23.3
無回答	1.1	2.6	0.6	1.9

親世帯への偏見を感じている母子世帯が少なくないことが分かる。

自由記述には、未婚母子世帯の母が日常的に感じた偏見が挙げられている。未婚母子世帯の母のうち、53 人が自分が感じた偏見について具体的に記述していたが、23 人が母自身また子どもに対する無理解や偏見を感じていた。例えば、未婚で出産した為、距離を取られたり、いい顔をされないという偏見を感じている。

- ひとり親で未婚、となると少々距離をとられているような感じが以前ありました。
- 未婚で出産したため（知っている人から色々言われた事がある）。
- シングルマザーというだけで、いい顔はされない。子供に何かあったらどうするのか？など質問責めになる。未婚の為それを知られるともっといい顔されない。

また、「未婚で出産することは自己責任なのに、納税者の税金で生きている」という偏見もあった。

- 手当に対し「税金のムダ使いだ」や「自分で選んだ道なのに手当をもらうな」など言葉での偏見。
- 生活保護なんだー。働かなくても食べて行けるね。私達の税金で生きている。
- ひとり親はいいねーお金かからなくて等イヤミをよく言われてました。

表 27 ひとり親世帯の為社会的な偏見を感じたこと (単位：%)

	未婚 (178)	離別 (1,361)
感じたことはない	56.7	64.2
感じたことがある	38.8	31.6
無回答	4.5	4.2

- 仕事をしなくても生活できと言われる。

さらに、未婚で出産するのは、「だらしない」、「子どもの躰によくない」という偏見があった。

- だらしないと思われる。
- 若いママだから、シングルだから、のレッテルで決めつけ。
- 些細な言動でも、異性を意識して生活しているのではないかという偏見。とても悔しい思いをした事があります。
- 好きで未婚の母になったわけじゃないのにダラしいと思われるかしてました。(和解しましたが) 男はえらいねー女はだらしがないなどひとり親のイメージはこんなもんだと今でも思います。
- 子供が小さい時、保育所の子を噛んでしまった。たたいてしまっただけで、ひとり親だから躰できていない。

10 人が、ひとり親家庭である為、子どもが偏見を受けたり、先生や他の保護者から厳しいまなざ

しを感じたと記述している。

- 担任から、「〇〇君（息子）はお母さんも若いし、ひとり親だから何をしても目立つ。他にもっと落ち着きのない子がいても、クラスのお母さん達は〇〇君に注目する」と言われ、偏見を感じた。
- 同じ学年（小学校）の親が自分の夫の話をする時、会話に入っていけない。知っているのに「夫に子供を預けて飲みにいきましょう」の誘い。
- 母だけなので子供が「あの子とは遊んだらダメだよ。お父さん居ないんだから」とか言われたことがある。
- 子供の学校行事の時、りょうしんがそろってなく、母1人、または祖母と2人というのが、周りの見方が違う様に感じる事があった。

9人は、「窓口の職員」から偏見を感じたことがあったと記述していた。

- 書類提出に行った時や、用があってその課に行った時、担当している以外の方が内容用を座っている者同士でこそこそ伝えて話したり、話しながらジロジロみってくる感じが嫌だった。
- 婚外子のため色々手続きの際、細かな説明をしないとならず、心理的負担が大きい。

5人が「近所のうわさ」を感じたと記述している。

- 近所の人で嫌なうわさを広める人がいる。

4人は「就職する時」や「職場で上司や同僚から」の偏見について記述している。例えば、未婚で出産することで職場から退職をすすめられたり、就職する時にひとり親である為、不採用となることがよくあった。

- 未婚で産むことから以前の職場を退職させられた。「不倫したのでは？」と聞かれた。書きさ

れないくらい沢山ある。

- 就職の面接で、ひとりで子どもを育てるような幸せな生活をおくれない人間は採用しないと思うと言われたことがある。子供が小さい時は面接の際はかなりじゃけんにされた。そもそも結婚してないのに妊娠を職場に伝えた時に退職をすすめられた。

1人が「親・親戚からの無理解」で、未婚の母である為、家族に恥をかかせたという偏見について記述していた。

- 未婚の母という事を恥だと言う親戚がいる。

1人は「友達の無理解」という偏見であった。

- 友人に母子手当をもらってる事をうらやましがられた。

また、「現在の生活において感じていること」という自由記述形式の質問に対し、75人の未婚母子世帯の母が回答していたが、このうち7人の回答が日常的に感じた偏見に関するものであった。例えば、子どもが体調不良時に、ひとり親で子育てをきちんとしていないと思われるという。

- 子供の顔色が悪かったり、学校で体調不良を訴えると、「寝不足じゃないですか？」「家庭状況はどうですか？」と疑うような電話がかかって来て、すごく困る。一生懸命に子育てをしても認められないんだなあと感じます。

以上のように、社会から色々な場面で、家族、職場、学校などがひとり親、特に未婚の母に理解をあまり示さないということがある。未婚母子世帯が家族や社会から認められにくいことが、社会的孤立のリスクにつながる事が考えられる。

（3）制度利用

未婚母子世帯の母は、経済的・仕事と子育てにおいて大きな葛藤を抱え、また、周囲の支えを欠

表 28 ひとり親世帯にかかわる制度や相談員の利用経験と認知

(単位：%)

		利用した ことがある	知っている が利用した ことはない	名前だけ 知っている	知らな かった	無回答
母子世帯等就業・自立支援センター	未婚	19.7	30.3	33.7	14.0	2.2
	離別	9.0	36.4	28.4	22.6	3.5
女性相談援助センター（配偶者暴力相談支援センター）	未婚	3.4	25.8	31.5	35.4	3.9
	離別	3.3	23.7	27.0	42.6	3.3
民生委員・児童委員	未婚	10.1	39.3	32.6	16.3	1.7
	離別	9.2	42.0	30.0	15.4	3.4
母子・父子自立支援員	未婚	2.2	23.6	25.8	43.8	4.5
	離別	2.9	23.1	23.4	47.4	3.1
母子生活支援施設（旧称：母子寮）	未婚	2.8	34.8	24.2	34.3	3.9
	離別	0.6	28.9	24.8	42.3	3.4
児童相談所	未婚	11.2	51.7	30.3	3.9	2.8
	離別	9.8	55.6	26.5	5.1	3.0
公共職業安定所（ハローワーク）	未婚	71.9	16.9	6.2	2.2	2.8
	離別	73.9	18.2	4.0	1.5	2.4
マザーズハローワーク	未婚	24.2	22.5	11.2	38.8	3.4
	離別	14.8	22.9	11.7	48.0	2.7
生活保護	未婚	32.6	51.1	11.2	2.2	2.8
	離別	15.7	68.8	11.4	1.6	2.5
生活福祉資金	未婚	4.5	28.1	22.5	41.6	3.4
	離別	3.5	29.1	16.5	47.5	3.4
母子父子寡婦福祉資金貸付金	未婚	1.1	25.8	20.8	47.2	5.1
	離別	5.6	28.8	18.1	44.5	2.9
自立支援教育訓練給付金	未婚	5.6	30.9	20.8	38.2	4.5
	離別	4.4	33.1	20.8	38.4	3.2
高等職業訓練促進給付金	未婚	2.8	24.7	19.1	48.3	5.1
	離別	3.0	25.6	17.7	50.7	2.9
高等学校卒業程度認定試験合格支援給付金	未婚	0.0	14.6	17.4	64.0	3.9
	離別	0.3	17.0	12.0	67.9	2.9
高等職業訓練促進資金貸付事業	未婚	1.1	15.2	16.3	64.0	3.4
	離別	0.4	17.7	12.8	66.1	3.0

注）未婚 178 世帯、離別 1,361 世帯

いている状態であることが分かる。未婚母子世帯に対する適切な政策や制度的な支援が求められるだろう。

表 28 はひとり親世帯に対する様々な制度・サービスがどの程度認知されているかを示したもので

ある。全体として、「公共職業安定所（ハローワーク）」が一番利用されており、7 割を超えた。「生活保護」「マザーズハローワーク」「母子世帯等就業・自立支援センター」「児童相談所」などの認知度も高いが、利用率は離別母子世帯より未婚母子

世帯の方が高い。未婚母子世帯は社会関係が薄く、周りの支えが不足しており、また社会とのつながりも少ないため、制度上において、求められる支援が多いと考えられる。一方、「高等職業訓練促進資金貸付事業」「高等学校卒業程度認定試験合格支援給付金」については、いずれの世帯においても6割以上が知らないと回答している。

制度を知っていると答えても、制度を利用していない母子世帯の割合も少なくない。この問題に関して、未婚母子世帯の自由記述から、課題が多く存在すると考えられる。例えば、支援情報を知らず、また制度について分かりにくく、子育てと仕事などに精一杯で、詳しく知る余裕がないという現状が確認できる。

- 知らない公的制度が多い。知ってるならもっと教えて欲しい。後から知っても使えない。
- 公的制度がわかりにくいし、相談に行っても解決しない。

また、公的機関に窓口の職員から差別されたことがあって、偏見や非難されたくないため、知っても利用しないことが分かる。

- 書類提出に行った時や、用があってその課に行った時、担当している以外の人の方が内容を座っている者同士でこそこそ伝えて話したり、話しながらジロジロみてる感じが嫌だった。
- 婚外子のため色々手続きの際、細かな説明をしないとならず、心理的負担が大きい。

以上のように、公的機関における福祉制度や支援情報が、どのように多くひとり親家庭に認知され、より多く利用されるようにできるか改めて考えるべきである。また、ひとり親世帯に支援する時に、公的機関、窓口の職員の対応を改善すべきと思われる。

5. まとめ

本稿は、「2017年北海道ひとり親世帯家庭実態

調査」を基に、未婚でひとり親となった母子世帯の生活の実態を明らかにした。また、未婚母子世帯の母の社会関係の特徴について考察してきた。

調査結果の分析から以下のことが示される。まず、世帯状況、経済状況、仕事および子育ての四つの側面から、未婚母子世帯の生活の実態を確かめた。世帯状況については、今回の調査対象が児童扶養手当受給世帯であったこともあり、母の年齢は若い層が多い傾向にあった。また、末子年齢も小さく、低学年層に集中していた。経済状況については、経済的な困難は多くの母子世帯にとって最も大きな問題であることが分かった。特に未婚母子世帯は年収が低い方に集中し、経済的にはかなり厳しい状況であることが明らかになった。そのため、多くの未婚母子世帯の母が将来の生活に対する不安を抱えていることも見受けられた。仕事については、母子世帯の母は全体として、いずれの時期でも就労率が高く、また収入が低い非正規の仕事で働く母が多いことも確認できた。加えて、仕事においては、収入が少ないことが最も大きな悩みであり、また、仕事と子育ての両立が大きな課題であることが分かった。子育てにおいては、「子どもの学習や進路」に関する悩みが一番多かった。また、子どもに高等教育を受けさせた未婚母子世帯も多いが、脆弱な経済的基盤であるため、子どもの教育や子育てに関する支出が制限されている現状も浮かび上がった。

社会関係については、日常的な支援、主に子育てに関する支援は、保育・就学前教育制度を利用している世帯が多いが、それ以外では、未婚母子世帯の支援は親・親戚によるものを中心であった。しかしながら、離別母子世帯と比べて、親や親戚からの援助が少なかった。母自身が20歳までに経験した困難についても、離別世帯より未婚世帯の母は自分自身の子ども期に多く困難に直面していた。未婚母子世帯の母は親・親戚以外に頼れる人は少なく、社会関係が薄く、社会から孤立するリスクも存在すると考えられる。

ひとり親世帯にかかわる公的制度については、ハローワーク以外の認知度が低く、利用率も低い

という実態であった。自由記述の回答にあるように、情報が得られなく、差別されるため、利用しにくいという課題が見られた。

未婚母子世帯の自由記述回答からも、経済的、仕事や子育てにおいて大きな葛藤を抱えながら生活していること、家族や社会から認められにくいと感じており、社会的孤立のリスクが高いこと、また差別や偏見を受ける可能性も存在することが見られた。ただし、量的なデータにおいては、これらの点について、未婚母子世帯と離別母子世帯との顕著な差は見られなかった。その原因の1つとして、今回使用した「2017年北海道ひとり親家庭生活実態調査」の中に、未婚や非婚という理由でひとり親となった母に対する質問項目、また未婚母子世帯になった前後の状況に関する質問項目がほとんどないためと考えられる。

今後の調査においては、未婚という事由でひとり親となった女性の生活や社会関係に注目し、彼女たちの社会関係において、どのような社会的不利があるかを明確するためにも、調査項目として、母子世帯になった期間、妊娠する前、妊娠時期、

また出産後のそれぞれの時点や時期に関わる人（親・親戚・友人・近隣・職場の人などを含めた）と生活に関する質問項目があるべきと考えられる。こうした点から未婚母子世帯の社会関係を確かめ、また、出産前後における生活の変化から、具体的にどのような社会的不利があるのかを明確にできると考えられる。

文献

北海道大学大学院教育研究院（2018）『2017年 北海道ひとり親世帯生活実態調査報告書』

厚生労働省（2016）「平成28年度 全国ひとり親世帯等調査結果報告」

厚生労働省（2016）「平成28年 国民生活基礎調査の概況」

湯澤直美（1999）「非婚母子家庭の形成過程と社会的支援策の課題—社会的福祉施設利用の非婚母子家族に焦点をあてて」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要第1号』149-165

（北海道大学大学院教育学院・博士後期課程）

